



熱海フラスクールの3名の淑女

高齢者が健康維持のためによく行う習い事の代表格でもあるフラ（正式にはフラでよいのですが、日本では慣習的にフラダンスと言われることも多い）。熱海を初めとして、静岡県内に幾つもの教室を持つ熱海フラスクールの活動を熱海ビーチに訪ねました（本当は、各教室で行う練習を、特に熱海スクールの皆さんが熱海ビーチで「熱烈歓迎」で待ち受けてくださったのです）。その中でも、今回この教室のベテランのお二人、森野洋子さん（80歳＝写真左）と松尾登喜子さん（85歳＝写真中央）、そしてその先生である福鳥敏子さん（77歳＝写真右）にお話を伺わせていただきました。

海岸脇ロードにある見物席（熱海名物の花火を見物する時の見物席にもなる）ベンチでお3人のインタビューを始めた時、ちょうどそこを通りかかった住民（なのか、観光客なのか）からいきなり「今年は花火やるんですかね？」との質問が飛んできた。すかさず、「7月は中止ですが、8月以降はわかりません」というご返事が森野さんから返ってくる。「え～？いきなりそっちの話ですか？」と思いつつも、本題のフラの話に水を向ける。

一番左側に座られた森野さんにお名前を尋ねた後、「失礼ですけどお幾つでいらっしゃいますか？」と尋ねる（女性にはこの質問が一番しにくい）。「今年、80です」ときっぱりお答えになられた瞬間、横から「いや、見えない、見えない。ビックリしちゃった。美魔女、びまじょ！」の声がかかる。このグループの明るく楽しい雰囲気がいきなりわかった瞬間だった。ご近所の方に誘われて還暦の年に始めてからもう既に20年とおっしゃる森野さん。「飲食店をやっているもので、最初は夜のクラスに通っていたのですが、後から昼間のクラスに変えて皆さんと仲良く練習しています」どこでもそうだろうが、フラのグループは、地域の行事へのお誘いが多い。老人会、お祭り、施設への慰問、等々。ひょっとして、皆さんはデイサービスなどの介護サービスを利用することなどないのだろうか（利用されてても何の不思議もないお年だが）。「いや、とんでもない。私たちがボランティアで踊りに行くんですよ」と笑い飛ばされる。そうでしょう。そうでしょう。きっと地域の同年代の高齢者の方々から羨ましがられる存在なのだろうと思います。

そこで、愚問とは知りつつこんな質問を試みる。

「皆さんの健康法は？」

言った瞬間「やっぱり聞くんじゃなかった」と後悔の念が起こったが、答えは予想通り、「フラをやれば、これ以上身体も気持ちもハレバレとすることはないです」



#### 先生も参加

途中から、渡辺君枝先生(76歳=写真上左)と、スクール主宰の牛島一枝先生(写真右上)も話に参加していただく。  
「大体、これ(フラ)って、続けることが一番大事ですけど、みんな楽しくやってますし、何よりもスマイルが大事なんですよね」  
こんな言葉が(全員から)異口同音に発せられる。  
そう言えば、最初に皆さんが集まって群舞を踊ってくださった時も、先生から盛んに「スマイル、スマイル」という声がかかっていたことを思い出す。  
すかさず、福嶋先生からも「笑顔が健康の秘訣。皆さん、本当に休むのがイヤだとおっしゃって練習を待ち遠しく感じていらっしゃるようですよ」  
そうですね、そうですねと相槌が次々に起こるのを見ても、このフラスクールを皆さんがどれほど楽しんでいらっしゃるかがよくわかる。



#### 熱海名物ハカランダの木～紫に香る南国の匂い

いつの頃からか、熱海の街角にハカランダの木が植樹されるようになった。メキシコを初めとした南米諸国に多いハカランダ(英語式にジャカランダと発音される人も多い)の紫の花が綺麗に咲き誇っている熱海の海岸通りです。その硬質な木材は、高級ギターなどの楽器の材料として利用されることも多い美しい木だ。  
早咲の大島桜。梅、そしてソメイヨシノ、ツツジ、そしてハカランダ、紫陽花と熱海に花の切れ間はない。



[熱海ビーチに咲くフラの花](#)



[海をバックに踊る熱海フラスクールのフラガールたち](#)

とにかく楽しいインタビューでした。

こちらから「あれしてください、これしてください」と頼むまでもなく、皆さんの方で段取りを決めてくださり「じゃあ、次はここで写真を取りましょう。今度は集合写真で」といった具合に段取りよろしく楽しい時間を過ごさせていただきました。

最後には、私も含めた集合写真まで先生に撮っていただいたのですが(今回は掲載致しませんが)、ただでさえ他の場所よりも暖かいイメージのある熱海で(だから熱い海なのでしょうが)フラを踊る皆さんは、まさしく「もうこれ以上の健康法はない!」という確信のもとに日々を暮らしていらっしゃるんだんということが強く印象に残った、熱海フラスクール探訪記でした。

そう言えば、今日現在もまだ「新型コロナウイルス」の影響は世界に色濃く残っているはずなのに、どなたからもコロナの「コ」の字も聞かれませんでした。皆さんの日常は本当に健康そのものなのですね(ナツク)。

取材: 東・南・西伊豆地区担当 生きがい特派員 満富 俊郎